

コンゴ伝道に見る異文化接触 [37]

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

私がコンゴブラザビル教会の鼓笛隊に関わるようになったのは1986年6月のことである。コンゴブラザビル出張所に濱田道仁氏(現ハワイ伝道庁長)が赴任し、新たな体制でコンゴ布教が進められようとしていたが、その中でノソング会長が強く要望していた常駐の鼓笛隊の指導者としてその一員に加えられた。

練習日の初日、集まった隊員たちの顔ぶれを見て驚いた。それはもはや「少年会」活動ではなかったからだ。平均年齢は17～18歳で、中には30歳になろうかという人も混ざっていた。当時の隊員の多くは、1977年の鼓笛隊発足時のメンバーだった。ただ、新たな鼓笛指導者が来るというニュースは近隣にも伝わっていて、新顔の子供たちの姿もあった。演奏に関しては、長年同じ曲を繰り返し、またその数ヶ月前から永尾教昭氏(現海外部次長)が指導していたこともあり、想像していたよりも上手であるという印象を受けた。

7月からはバカンスだったので、練習は毎日のように行った。子供たちにとっての娯楽が少ない中、鼓笛活動は大きな魅力でもあったようだ。練習の開始時間が守られたことは少なかったが、それでも子供たちは休まずに練習に来た。小さな子供(と言っても14～15歳前後)を中心にした練習で、しかも初心者が多かったので、鼓笛隊を「極めた」と自負する「大人」の隊員たちは、練習のレベルの低さに愛想を尽かしたのか、しばらくして足が遠のいていった。

当初は、隊としての規律を守るため、試行錯誤を重ねた。時間厳守を徹底させるため、出席簿を作り、毎回出席を取ることにした。一定の期間、無遅刻無欠席の者は、何らかの褒美をもらえるようにしたところ、少しは効果が上がった。ただ、家の手伝いや幼い兄弟姉妹たちの世話、また単に家に時計がないというような子供たちも少なくなく、時間通りに始めることがいかに難しいかを痛感した。

3ヶ月が過ぎた9月頃、初心者が育ち演奏できるようになってきた。入隊希望者は増え続け、その頃には30～40名の新しい隊員がいた。一方で、練習した成果を披露する機会がないのが子供たちの不満となってきた。日本での鼓笛活動には、こどもおぢばがえりや教区等で開催されるコンクール、また地域のイベントなど、練習の成果を人前で披露する機会がある。また、そうした機会に出会う他の鼓笛隊は、比較の対象ともなり、それはモチベーションにもつながっていく。コンゴでは、天理教の鼓笛隊以外に鼓笛隊は存在しない。そもそも、子供を中心としたこうした活動は他に類がなかったようだ。ただ、それが地域社会に根付く大きな利点でもあった。

人前での演奏機会がないことを考慮し、10月の教会の大祭後に神殿前で「お供え演奏会」を行った。ノソング会長夫妻をはじめ、所長や教会役員、大勢の参拝者の前で日頃の練習の成果を披露した。また、近隣にも鼓笛隊の存在を宣伝する意味も込めて、教会の周辺を行進した。大勢の人の目を引き、その効果は絶大だった。次の練習日にはさらに多くの入隊希望の子供たちがやってきた。また、それが契機となって、地域のイベントや国の行事への参加依頼が来るようになっていった。

私の着任後、鼓笛隊がそうした行事に初めて招待され演奏したのは、11月15日の音楽グループのコンテスト大会の開会式と閉会式での演奏だった。教会を上げての参加となった。当日の演

奏や行進の様子は、日本のレパルとはまったく比較にならないだろうが、それでも他との「比較」の対象がないコンゴにおいては、それは「見事な出来映え」であったようだ。



マケレケレ区役所前での演奏(1986年)

それ以来、3年半の間に15～16回の演奏依頼を受けた。大統領や大統領夫人が出席する政府行事やマケレケレ地区(コンゴブラザビル教会のある地区)におけるさまざまな行事、サッカー選手権等のスポーツ大会の開会式、また企業の宣伝のキャンペーンなどにも演奏の依頼があった。濱田氏の幼い子供たちがコンゴ人の子どもたちと手をつないで歩いた行進では、多くの人から賞賛を受けた。とくに国内最大のイベントでもある8月15日の独立記念日のパレードでは、教会のあるマケレケレ地区グループの先頭を立てて行進した。鼓笛隊演奏時は、パレードの間ずっと演奏し続ける軍の楽隊もその演奏を止めた。数分の間、鼓笛隊の曲だけがコンゴ国営テレビやラジオから流れた。それが『教祖百年祭の歌』だったこともあった。他にも、独立記念行事に招待された他国の大統領が降り立つ飛行機のタラップ付近や国会議事堂、大統領官邸など、一般のコンゴ人では通常入れないところでの演奏機会もあった。テレビで生中継されたり、夜のニュースで報じられたりしたことも少なくなく、「Fanfare de TENRIKYO」は教会周辺地区だけでなく、首都ブラザビル全体に知れ渡るようになっていった。かつてコンゴにおける天理教と言えば「天理教＝診療所」というイメージが先行していたが、それが「天理教＝鼓笛隊」となったと言っても過言ではなかっただろう。

葬儀もまた、鼓笛隊の演奏の機会となった。隊員や教会関係者の家族や親戚が亡くなると、鼓笛隊がその「弔い演奏」に出かけるのである。その際、現地の曲も演奏していたが、なぜか決まって『おやがみさま』の歌が演奏され、次第に葬式の定番の曲となっていった。

鼓笛隊のこのような活動は、教会本部の物質的援助や、濱田夫妻をはじめ出張所のスタッフの働きによって支えられていたと言える。教会本部からの助成で新調されたユニフォームや楽器の補充、それらの維持・管理などは、当時のコンゴブラザビル教会のスタッフだけでは到底出来なかっただろう。つまり鼓笛活動を通じて「教会活動をサポートする」出張所は、その役割を大いに発揮したと言えるのである。

このような中、鼓笛隊は子供たちにとってもあこがれの的となり、一番多い頃には150名近くの子供たちが集まっていた。鼓笛隊の名前が知れ渡るようになってくると、他宗教で行われている音楽活動や軍の楽隊からの指導依頼が教会に舞い込んだりしてきた。ノソング氏も会長として、このような鼓笛隊の活躍を喜んでいたのである。ただ、鼓笛隊活動が活発になり、また人数が増えてくるとさまざまな問題も浮上してきた。

(つづく)